

# 「傾聴」に重き置き対処

漢方外来を受け持つ山崎武俊さんは洛和会音羽病院循環器科（心臓内科）副部長でもある。医師として20年のキャリアを持つが、東洋医学と出会い、漢方の分野にも注力するようになった。すでに15年が経過する。「これといった原因もなく体の辛さを訴える人を、『気のせい』と片付けずに漢方による治療で症状を緩和させる先輩医師の治療姿勢に、違う世界をみた気がした」。それが東洋医学を学ぶき

洛和会音羽病院 循環器科副部長  
心臓内科／漢方外来

山崎 武俊さん



っかけになったと話す。そもそも漢方外来では、疲れやのぼせなど原因を特定できな

いさまざまな症状を訴える人が多い。なかには入院手術を経て外来通院へ移ったあとに、同様の不定愁訴で悩む人もあるそう。そういった場合に東洋医学では話をよく聞くこと（傾聴）に重きを置く。その辛さはどう対処するか、心を解きながら症状に合った漢方薬を探す。

西洋医学の見地であきらかに治療が必要な症状はまずその処置を心がける。いわば体を構成する部品に不備がある状態であれば、それを修理交換して改善を図る。しかしそういった診断ができない場合、東洋医学では

機能的な異常がないかを総合的に診る。つまり体を機能体として捉え、バランスが崩れた状態ではないかを探るのだ。「両面から診ることは診断の幅を広げ、症状の悩みを解決するための手段が増えることになる」という。

そして「検査では異常が無い辛い症状に対しても、じっくり話を聞いたうえで、即日治療を始めることができるのが漢方の強み。二つの医療分野の橋渡しをしつつ、それぞれの良いところを融合した治療ができればと思う」とも。